



Title	南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究
Author(s)	松下, 孝幸
Citation	(1991-03-31)
Issue Date	1991-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/29416
Right	

This document is downloaded at: 2019-02-17T03:51:41Z

松下 孝幸 (長崎県) 昭和25年8月17日生

授与年月日 平成3年3月31日

主論文 南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究

論文内容の要旨

はじめに

日本人の形質的基礎ができあがり、その地域差の原形が形づくられたのは、おそらく古墳時代(4世紀~7世紀)であろうと言われている。古墳時代人骨の研究に関しては、一つの遺跡から多くの人骨が出土しないために各地域ごとの特徴を明確にすることができない現状である。

古墳時代の南九州地域は、記・紀に誌されている「熊襲・隼人」の居住地であり、その形質を明らかにし、由来を探ることは興味深いことであり、また日本人生成の問題を考察する上からも重要なことである。

資料および方法

資料は、長崎大学医学部解剖学第二教室保管の南九州地域出土の古墳時代人骨63体の男性骨であるが、その時期は古墳時代中期および後期に属するものである。

方法は、Martin-Saller の計測法に拠ったが、一部は Howells の方法に従った。

結果および考察

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋 南九州古墳人の頭蓋長幅示数は、最大値が88.24(跡江)で、最小値は72.43(諏訪野)であり、過短頭型から長頭型まで著しく変異に富んでいる。しかしこれを地域別にみると、宮崎平野に短頭型の一群があり、宮崎県より鹿児島県に及ぶ山間部では、短頭型と中頭型が混在し、さらに周辺地区では長頭の傾向が強くなる。また鹿児島県南部の大隅・薩摩半島では短頭型が認められる。

山間部古墳人は、他地方の縄文、弥生、古墳人と大差はないが、宮崎平野、大隅・薩摩半島に見られる古墳人の短頭型は一つの特徴であろう。ただ宮崎平野の中で、柿木原遺跡の人骨のみは長頭に近い中頭であり、また頭高においても他の南九州地域のそれより著しく低く、やや特異的である。

(2) 顔面頭蓋 南九州の山間部古墳人は、「低・広顔」傾向を示し、宮崎平野の古墳人は「狭・高顔」傾向が強い。眼窩および鼻部の形態も、顔面全体の形にそれぞれ相応している。ここにおいても宮崎平野の柿木原古墳人は顔面全体の形は他の平野部古墳人に似ているが、眼窩および鼻部の形態は山間部古墳人に類似している。

南九州の山間部古墳人の顔面頭蓋は、西北九州、大友両弥生人および縄文人に近いが、これらよりもより強い低顔性が認められ、大きな特徴に数えられる。宮崎平野の古墳人は北部九州の弥生人に近似しているが、柿木原古墳人の眼窩および鼻部はむしろ西北九州弥生人に近い。

(3) 偏差折線、主座標分析 計測結果から南九州古墳人を山間部と、平野部(I)および平野部(II)(柿木原)に分類し、他地方の縄文人、弥生人、古墳人等との間に偏差折線を描いて観察し、また頭蓋主要14項目について、ペンローズの形態距離を算出し、主座標分析を行い、これを2次元に展開してみた。これらの結果は、いずれも山間部古墳人は西北九州、大友両弥生人および縄文人に近親性が認められ、平野部(I)の古墳人は横隈孤塚、金隈両弥生人および筑前古墳人に近似していた。また平野部(II)の古墳人はこれらいずれの群とも近似性を見出し得なかった。

(4) 畿内古墳人との関係 記・紀によれば、「隼人」と畿内古墳人とは歴史的に深い関係があるので、計測

値、偏差折線および主座標分析により比較してみると、南九州古墳人の中では、平野部(I)の古墳人のみが、近い関係を示していた。

2. 推定身長

ピアソンの公式により、大腿骨最大長をもちいて推定身長をもとめると、南九州の平野部(I, II)古墳人はいずれも160cmを越え、高身長であり、北部九州弥生人よりもむしろ高い値を示している。山間部古墳人は低身長で、縄文人、西北九州、大友両弥生人、朝田古墳人に近く、顔面形態と同じ傾向を示している。

結 語

1. 南九州地域の古墳人の形質は、山間部、平野部(I)および平野部(II)の3型に分類できる。

2. 山間部古墳人は、縄文人およびその継続と考えられている西北九州型の弥生人に類似した形質をもっている。平野部(I)の古墳人は、北部九州型の弥生人に近似しているが、平野部(II)の古墳人は近隣地域に同質の形質を見いだし得ない。

3. 以上要するに、南九州地域の古墳人は、広く山間部に縄文人由来の形質が認められ、一方宮崎平野では非縄文人的形質の進入がうかがわれるが、その招来された時期については、この地域で弥生人骨が出土していない現状では、これを明らかにすることはできない。

論文審査の結果の要旨

松下孝幸は、昭和49年3月山口大学文理学部理学科を卒業、同年4月長崎大学医学部解剖学第二教室の研究生となり、同51年4月助手、同56年4月講師、同61年1月助教授となって現在に至っている。その期間を通じて解剖学第二教室主任内藤芳篤教授の指導を受け、形質人類学の研究に従事して多くの業績をあげた。

平成3年2月「南九州地域における古墳時代人骨の研究」を完成し、これを主論文として、参考論文19篇を添え、長崎大学大学院に医学博士の学位を申請した。

長崎大学大学院医学研究科はこれを平成3年2月6日の定例委員会に付議し、論文内容の要旨を検討し、研究経歴を審査した結果、受理して差し支えないものと認めたので上記の通り審査委員を選定した。委員は主査を中心として慎重審議し、平成3年3月20日の定例委員会でその結果を報告した。

主論文は、長崎大学医学部解剖学第二教室保管の南九州地域出土の古墳時代人骨63体(男性)を資料として、脳頭蓋、顔面頭蓋および推定身長に関して詳細な人類学的検討を行ったものである。

南九州地域の古墳人の形質は、山間部、平野部(I)および平野部(II)の3型に分類することができる。山間部古墳人は、宮崎、鹿児島両県にわたる山間部に広く分布し、西北九州地域の弥生人にきわめて近似し、

縄文人的特徴を強く残している。一方、平野部(I, II)古墳人は、宮崎平野に分布し、非縄文人的特徴が認められ、そのうち平野部(I)古墳人は北部九州地域の弥生人に近似しているが、平野部(II)古墳人は近隣地域にこれと同質のものを見出し得ない。古墳時代の南九州地域は、記・紀に誌されている熊襲・隼人の居住地であり、関連科学の成果とも考えあわせて貴重な報告と考えられる。

研究科委員会は、審査委員の報告にもとづき、討論に付して審議した結果、本論文は形質人類学の進歩に貢献するところ大であり、学位に値するものとして合格と判定した。

審査担当者	主査	教授	内藤	芳篤
	副査	教授	中根	一穂
	副査	教授	岩堀	修明